特別支援教育課便り　　教職員・幼児児童生徒・保護者を応援します！

# サポート

NO.１３８号
平成２９年２月２８日発行
県教育庁特別支援教育課　指導班

## 寄稿　「研修人事交流を終えるにあたって」

平成２６年度から２８年度の３年間、研修人事交流教員として勤務されたお二人の先生から、３月に任期を終えるにあたっての所感等を寄稿いただきましたのでご紹介します。

### 「通級指導教室から学んだこと」

仙北市立角館小学校
教諭　堅持　夕子

桜の町の角館小学校での３年間。通級指導教室を通して、子どもたち、保護者の方々、先生方からたくさんのことを学ばせていただきました。

１年目。目の前にいる子どもたち一人一人の困り感が多様で、どんな指導をしたらよいのか悩む毎日でした。本を読んだり、通級指導教室の担当者の先生方に相談したりと、必死になって勉強しました。しかし、最後は、子どもとじっくりと向き合うことで何をすべきか見えてきました。教室で勉強に取り組めなかった子どもが、「本当はみんなと一緒に勉強したい」と泣いて話してくれたことがありました。どの子どもたちも「勉強したい」という気持ちをもっているのだと感じました。目の前の行動だけを見るのではなく、「子どもの心に寄り添うこと」が大事だと気付きました。

そして２年目。子どもたちが過ごす多くの時間は、家庭と在籍学級での生活です。通級指導教室での指導を生かすためにはどうすればよいかを考えました。そのために大事なことは、「連携」でした。保護者の協力、教室での支援（環境設定、周囲の子どもの理解など）、連携するためには様々な働きかけや話し合いが必要でした。子どもの長期的な姿を見通して、支援の調整をすることが担当として求められる力であると分かりました。

いよいよ最後の３年目。「先生、もう大丈夫。自分で何とかやってみるよ！」という言葉を残して通級指導教室を退級した子どもたちを、安心と心配の気持ちが入り交じりながら見送ってきました。この子どもたちが今後も安心して過ごしていくためには、支援が引き継がれていくことが必要です。それには、担当者だけが動くのではなく、校内の特別支援教育の支援体制が整っていなければいけないと感じました。角館小学校では、特別支援教育コーディネーターを中心に支援体制が機能するように努めており、連携がうまくいくと子どもが変わっていくことを実感できました。

この研修を通して感じたことは、通級指導教室では、子ども自身が自分のことを知り、うまくいかなくても失敗しても、またやってみようと一歩前へ進む気持ちを育てていくことが何より大切で

はないかということです。一人一人の子どもと向き合い自立を目指す指導は、校種を問わず教育の原点だと思います。通級指導教室が果たす役割は、これからもっと重要性を増してくると感じています。毎年、桜の花を見るたびに、ここで学んだことを思い出し、今後の仕事に生かしていきたいと思います。３年間ありがとうございました。

## 「特別支援学校から学んだこと」

県立横手支援学校
教諭　柿崎　りか

担任した生徒のうちに言葉少ない内気な生徒がいました。そのときの私と同じクラスの担任だったＡ先生は、根気強く話を聞き、温かく接したり、励ましたりしながら指導していました。私の促しには動かなかった彼が、Ａ先生に促されると動き出しました。接し方や言葉掛けの力に感動したことが何度もありました。

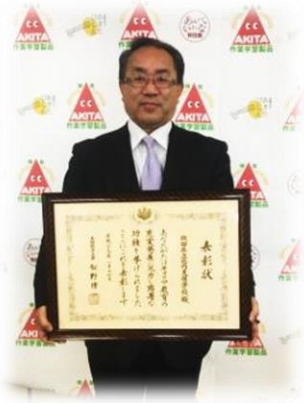
また、代表委員に抜擢された生徒がいました。担当が若いＢ先生となり、どうしたら彼のやる気を出すことができるかを考え、信頼関係を築いていきました。言葉少ない彼がクラスの友だちに思いを伝えたり、副会長の補佐役などで活動をしたりしていくうちに、どんどん表情が変わっていきました。教科の授業では個別に学習していましたが、小集団の中で学習できるようになり、学習面でも少しずつ自信を付けていきました。生活単元学習のグループリーダーを務め、学年の友だちにアドバイスする場面も見られるようになりました。冬休みの計画表に一行日記を書いてくるようになったとき、保護者も喜び、面談ではみんな笑顔で成長を振り返ることができました。その後、彼はさらに頼もしくなり、部活動で活躍したり、自転車通学を始めたりするなど大きな成長を遂げています。「あなたなら、きっとできるから」と励ますこと、活躍できる機会を見逃さないこと、できたときにすぐに褒めること、どうしたら分かりやすく伝えられるかを考え、工夫すること、そしてそれらを積み重ねることがいかに大切かということを教えられました。

学力の向上、生徒指導、生活の指導、保護者対応など様々な状況の中で、短時間に結果を求めようとすると、その子のできないことについ目がいってしまうように思います。しかし、私が特別支援学校で学んだことは、子どものわずかな変化を捉えて、子どもが変わっていく機会を見いだすということでした。

私はこれからも、子どもたちの良さや可能性を見つけ、長い目で根気強く、褒めたり諭したり励ましたりする言葉掛けを行い、そのための言葉の力を磨いていきたいと思っています。

# おめでとうございます

## 第１０回キャリア教育優良学校<br>文部科学大臣表彰



キャリア教育の充実発展に尽力し、顕著な功績が認められた教育委員会、学校及びＰＴＡ団体等を対象とした「キャリア教育に関する文部科学大臣表彰」で、県内では、特別支援学校として初めて県立比内支援学校が表彰されました。

### 第１０回キャリア教育優良学校文部科学大臣表彰を受けて

県立比内支援学校

この度、本校はキャリア教育優良学校文部科学大臣表彰を受けることができました。秋田県で特別支援学校がこの賞を受けるのは初めてということで、開校から４０年以上に渡って築き上げてきた地域における教育実践が評価されたものと喜んでいます。

受賞理由には、平成２７年度に「特別支援学校職域開拓促進事業」の推進校に指定されたことを機に、新たな職域の開拓と地域の事業所との連携による職業教育の実践に取り組んだこと、また、地域行事に参加し、地域を学ぶことで人と関わる力や責任感等の育成等に努めたこと、これら一連の活動により、高等部卒業生の一般就労希望者全員の進路実現を果たしたことが挙げられています。

本校の実践については、昨年度、秋田県キャリア教育実践研究協議会や大館市ふるさとキャリア教育フォーラムで、今年度は本校自主公開研究会で高等部の生徒が発表していますが、以下、本校の特色ある活動を紹介します。

○地域の特産の活用や地場産業を取り入れた学習活動

高等部作業学習では、各班で地域の特産を使った商品開発や地場産業を取り入れた学習に取り組んでいます。

農園芸班では、ＪＡの営農指導員から技術指導を受けて大館市の特産品である枝豆を栽培し、収穫した枝豆を使ったクッキーなどの開発に、市内の高校や菓子業者と連携して取り組んでいます。また、バラの栽培では、地域のバラ園を経営する方から接ぎ木や選定の手ほどきを受け、２年目の今年度は数種類のバラが見事に開花しました。次年度は、栽培する花壇を広げ、鉢植えの販売を目指しています。木工班では、大館市の伝統工芸である「曲げわっぱ」の手法を取り入れた製品づくりに取り組んでおり、「現代の名工」から直接の技術指導を受けています。

バラの栽培

トレイの他、今年度はランプシェードなどの新作にも挑戦しています。陶芸班ではとんぶりや稲わらの釉薬を使ったきりたんぽ鉢を、縫製班では秋田杉の葉や学校の農場で栽培したマリーゴールド、藍、茜で染めた布のポーチなど、地域の特産を使った製品づくりに取り組んでいます。各班とも伝統工芸の難しい工程に挑戦することで、自分の仕事に自信と誇りをもって取り組むようになってきました。

曲げわっぱトレイの製作

２月には、本校の作業学習製品を「秋田杉ふるさと食卓セット」として、大館市の「ふるさと納税返礼品」に登録してもらいました。地域で認められ、地域に貢献できるように、一層質の高い製品づくりを目指していきます。

○地域行事への参加

今年度も、高等部では生活単元学習において学年ごとにテーマを決めて地域行事に参加しました。「達子森の夏祭り」「ハチ公よさこい祭り」「本場大館きりたんぽまつり」「比内とりの市」などに、それぞれの学年の生徒が自分たちで企画し、製作や調理に取り組み、そして当日は精一杯販売や演舞などを行いました。地域の方からたくさんの励ましや称賛を受け、生徒たちは達成感を味わうとともに、学習を通して地域の一員としての意識と将来の社会参加への意欲を高めることができました。

今回の受賞を機に、地域に根ざした活動を推進し、一人一人の自立と社会参加に向けたキャリア教育のさらなる充実を目指したいと思います。　　（教頭　鎌田　裕之）

ハチ公よさこい祭りへの参加

大館市長への報告

## 第４２回全国盲学生点字競技大会　個人賞高等部第２位

視覚支援学校高等部普通科２年　高橋　望さん

隔年で開催される全国大会高等部の部には、全国から３７校５９名の参加がありました。

昨年度の東北大会高等部の部では１位で、２年連続の入賞です。